

今を生きる : 悲しみという光

著者	徳永 道隆
雑誌名	真実心
号	40
ページ	79-111
発行年	2019-03-10
URL	http://id.nii.ac.jp/1108/00000903/

今を生きる

——悲しみという光——

徳 永 道 隆

話を聴く僧侶

みなさん、こんにちは。最後の講義でお疲れでしょうか。ただいま、ご丁寧なご紹介をいただきました徳永と申します。これから、しばらくの間、みなさんと共に、いのちを考える時間にしていききたいと思います。

先ほどご紹介いただきましたように、私はお寺の住職です。毎日お経をあげて、あるいは、お説教をしてまわるといふ生活をしています。その中であって、週に一度、必ず病院に伺って、お医者さんや、看護師さんや、患者さん、そしてその家族の方々とお会いして、話をお聞きしたり、あるいは話をしたりということを経験しているところです。

ただ、私自身です、みなさんはどうかわかりませんが、こうやって今は高い所で話をしていますけれども、実に自己主張が苦手な人間なのです。こんな高い所でしゃべって何を言うか、と思うかもしれないですけど、そうですね、中学生の頃でしたかね、結構いじめられることが多くて、ものを言わずにボコボコに殴られたことがあるのです。それ以来、自己主張をすることがすごく苦手になって、そして、お坊さんになりました。お坊さんというのは当然、説法をしなければならぬのですけど、それがまず苦手という、何とも言えない状況が続いていたのです。話ができないので、話を聞く方に回っていたのです。お会いする方々に、「今日はどうですか」「今日はどんなですか」と、お聞きすることが多かったのです。先輩の僧侶の方々には「徳永、お前それではダメだ」「お坊さんになったからには、一生懸命、仏法を説かなければいけないよ」と言われたのですけど、なかなかそれができずにいたのです。そうしているうちに、カウンセリングというものに出会いました。そして、仏教とカウンセリングには非常に繋がりとあるということをお聞きして、十年ほど勉強をさせてもらって、そして、それを、仏教徒として、僧侶として、実践するには、やっぱり、一番苦しんでいる方、病になっている方、死を目の前にされた方にお会いをして、お話を聞くところから始めようと思ったのが、ちょうど十年前でし

た。そこから、いろんな医師に「お坊さんを病院に入れてください」とお願いをして、大體の医師に「それは無理だ」と言われては来ましたけど、巡り合わせがありまして、今、数人の先生方、病院に勤めておられる医師や、在宅の医師とも連携を取って、患者さんを紹介していただいて、そこに外向くという形を取らせていただいています。そんな中から、今日はそうした患者さんとのふれ合いを通じて、あるいは仏法の教えを通じて、今私を感じていること、そして、みなさんにお伝えしたいことをお話したいと思います。

より良く生きたい

さっそくですけれども、みなさんでしたら、ご両親は四十代、五十代ぐらいですか？

私の娘が二十五歳と二十一歳ですので、たぶん、ご両親は同じぐらいの方がいらつしやると思います。私は五十歳ですけれどもね。五十三歳の女性です。乳癌と大腸癌を併発されている女性でした。依頼が来たのですね。「徳永くん、ちょっと会ってほしい患者さんがいます」「はい、行きますよ」ってその女性の所へ行きました。そうしたら、その方は開口一番、何と言われたか。「私は、もう死を覚悟しております。子どもも立派に育つたし、

何もやり残したことはない、とは言わないけれども、もうこうなった以上、死を覚悟しておられます」と突然おっしゃったのですね。「ああ、そうなのですか。すごいですね。なかなか死を受け入れることは難しいですよ」ってその方にお話したのですね。「でも、こうしてあなたにお会いするのは、じゃあ、その死に行く身はどうなっていくのか、お聞きしたいのです」そのように私に問いかけられました。そこで、少しばかり仏さまのお話をして、「必ず、お浄土にお参りしますよ」と話をしたら、「そうなのですか。でも、死を受け入れているとはいっても、私はまだ生きたいのです」「そうですか、それはもちろんですよ。ね。申し訳ないですけど、その理由を聞いていいですか」とお聞きしたら、「息子が今、遠くにいます」どこかは知りませんが、「遠くにいますので、息子に会えるまで、私は死ぬわけにはいかないのです」。もうその時点で余命が二週間と言われていた方でありませけれども、その二週間で、痛みを耐えて生き抜かれたのです。周りの看護師さんは痛みがあるなら当然抑えたい。みなさんはご存知かどうか知りませんが、痛みを抑えるということは、思考や、目を覚ましていることが非常に難しくなる場合も多々あるのです、強い痛みの薬をしますとね。ですから、そのことをその女性はご存知で、「息子と会えるまでは、この痛みを耐えてまでも、がんばります」と言われました。そし

て、看護師さんに「そんなにしてまで」と言われながらも、その方は必至に耐えて、息子さんにお会いして、そのまま、すつと亡くなっていられました。

「一切衆生悉有仏性」と読みます。これは、生きとし生けるものには仏になろうとする可能性（はたらき）がある、ということ です。今の女性のように、死ぬことはもうわかっている、覚悟もできている、でも、息子と会うまでは何としてでも生きつづけたい。これは、何もその方だけはないと思います。みなさんも今日一日、いろんな講義を受けて、いろんなことを感じられて、「ああ、今日この時間が終わったら帰れる」と思っていられないかもしれないかもしれませんが、その、ひととき、ひとときも、これに漏れることはないわけですね。より良く生きていこうとするものは、どんなのちにも元々備わっていますよ、いや、そうでなければ、元々のちというものは頂いていませんよ、というのがお釈迦さまの教えであります。みなさんはたぶん、いろんなことで悩んだり、苦しんだりすることも多いと思いますけれども、その日日であつても、より良く生きていこうとする私が、悩みとなり、苦しみとなるところも大きいかと思えます。そのことを、古く、二五〇〇年前にお釈迦さまはおっしゃっていたのですね。つまりは、より良く生きていこうとする実現傾向にあると言われます。もちろんこれは、元々持っているものではありますけれども、そ

れを妨げるものが多いのも事実です。人間関係であつたり、自分の欲であつたり、いろいろなものが妨げになつてゐることはありますけれども、元々はより良く生きていこうとするいのちに何ら変わりはありませんよ、というのが、この「一切衆生悉有仏性」という言葉でございます。

孤独感の強い現代

さて、みなさんは、もちろん平成十年…あたりのお生まれですか。ですよね、もし良かったら、このおじさんの顔を見ていただけるとありがたいです。十年ぐらいですか。十年か、十一年ぐらいですか。ね、はい。だから、こんな光景は見たことないと思います。(産湯につかる赤ちゃんと周りの人の姿) これは、赤ちゃんが産まれた時です。私ももう病院で生まれましたから、それよりもうちよつと前です。おそらく家で産婆さんが取り上げて、産湯につからそうとしていた時代があつたのですね。家で生まれて、家は基本的には農業が多かつたわけです。自分の食べるものは自分で作つて、家族みんなで仲良く分け合つて頂く、というのが昔の生活だつたでしょう。そうすると、その家族の中で、誰かが

病気になる、あるいは、亡くなっていかれるということを、家族みんなまで支えていた状況があったと思うのですね。今がないとは言いません、ないとは言いませんけれども、病院に入院されたら四六時中というわけにはいきませんよね。ひよっとしたらみなさんの中にも、ご両親や、あるいは、おじいちゃん、おばあちゃんが入院されているという方もあると思います。昔はそうやって、家族みんなまで病人を見て、そして当然「看取り」というのも家の中で行われていたわけですね。それは、地域全体でみていることでもありました。ですから、昔のお葬式なんて、すごかったらしいですよ。今はだんだんと簡略化されていて、少ない人数でお葬式を勤めるということが多くなってきました。これは当然な流れなのです。昔のような村とか町じゃないわけですから、少ない家族、身内だけでご葬儀を勤めるのは当然でしょう。ただ、そうなってくると、どうでしょうか。みなさんが生まれてからどういう変化を感じていらっしやるかはわかりませんが、少なくとも私のような年代のものは、この五十年でずいぶん変わったなという感覚を持っています。みなさんで言ったら携帯電話がそうですね。お若い時と、今もお若いですけれども、小さい時と比べてずいぶん変わってきましたよね。誰とでもすぐ直接話ができる。文字でも何でもやりとりができる。とても便利です。ですけど、ひよっとしたら、感じることはありません

せんか。孤立しているのではないかとまどい、病気になった場合、それに対する恐れ、情報がたくさんあつて、それが本当かわからないとか、ありませんか。これは、今の私たちが暮らしている中で、おそらく多くの方々が感じざるを得ない状況だと思います。昔のように、たくさん家族で、たくさん近所の方と、「どうしたの」「どこが悪いの」「何かあったの」と声をかけるような状況であれば、「そうそう、これが大変なのよ」「あれが大変なのよ」と言えていたのですけれども、今は隣の家の人が何をしているかわからない。顔も見えたことない。

昨日、私はあるおうちにお参りに行つたのですね。そしたら、その隣の家から、女性の方のすごい大きな声が聞こえたのです。大きな声が聞こえるというのはあまりいい内容じゃない場合が多いですよ。何を言つてらっしゃるか分からないけど、おそらく口論をしているなどということはわかつたのです。誰に向かつて言っているのかもわからない。それを、隣のうちの方に聞いたたら、「ああ、しょっちゅうありますよ」「たぶん、ご主人か、娘さんに、お母さんが怒鳴つてらっしゃるのでしょうか」「ああ、そうなのですか。結構あるのですか。で、どうするのですか」「いえ、どうもしません。これ、もし私が声を掛けて変なことになったらいけないでしょ」「ああ、そうですね」と言つて知らぬふりをする。

みなさんでしたらどうですか。隣の部屋の方が大きな声を出していたら、何かアクションを起こしますか。その方との関係にもよるかもしれませんが、人との関わりが希薄になってきたことが昔よりもおそらく増えてきた、あるいは感じていらっしやる方が多くなってきたことは間違いないと思います。今朝の新聞でしたか、昨年の学校でのいじめの件数が過去最多の認知数だったという記事が出ていました。いじめというのもまさにそこから来るものじゃないでしょうか。いじめる方にしても、いじめられる方にしても、何か孤独を感じて、それを思わぬ所に発散したり、それを受けたものも自分で閉じ込めてしまったりということもあると思います。みなさんの中でも、何か深い悩みにさいなまれている方もあるのではないのでしょうか。

ビハーラと緩和ケア

そんな中で、このビハーラという言葉です。昭和五十五年に、病院で亡くなる方と、おうちで亡くなる方が半々になりました。それまではおうちで亡くなる方がほとんどだったんです。今は病院が八割、九割と言われている、これからはどうなっていくかということ、

「おうちでできるだけ看取りましょう」というのが国の意向ではありませんけれども、どうなっていくかはわかりません。ビハーラは、一九八五年（昭和六十年）に、田宮さんという方が提唱された新しい仏教の運動の言葉です。

——ビハーラ (vihara) という言葉は、古代インドにおいて仏教経典の記録などに使用されたサンスクリットという雅語であり、「休養の場所、気晴らしをすること、僧院または寺院」などの意味を持つ言葉である。

（田宮仁 一九八五年）

場所であったり、何かを施していくということであったり、改めて仏教徒として行動しなければならぬという思いが始まったのが、この一九八五年であったわけですね。

今日は看護の方もいらっしゃるといふことですけれども、一九八〇年に日本に初めて「看取り」をする病棟ができました。それから五年後には、こうして、仏教者ならではの行動を起こした方が良いじゃないか、先ほど言いました、みんな孤立しているから、第三者が支えていかなければならないのではないか、昔がほったらかしだったとは言いません

けれども、積極的にアプローチしていかなければならない、この人の苦しみに積極的に関わっていかなければならない、と言われ出したのが、このビハラの活動であると思います。私が所属しています浄土真宗本願寺派では、その二年後、一九八七年から、このビハラ活動あるいはビハラ研修が始まっています。今年で三十周年を迎えたと聞いております。

このビハラを実践するのは、病院であったり、福祉施設であったり、お寺であったり、あるいは日常生活の中でもいいのですけど、狭い意味では病院や福祉施設で活動することを言います。私の主な活動場所は緩和ケア病棟なのです。終末期医療とも言われています。みなさん、関心ある方、ない方、あると思いますけれども、癌という病気になれば関わらざるを得ない所でもあります。これも、一九六七年にイギリスでホスピスが始まって、それから時間が経って、一九八〇年に日本に伝わって、またさらに一九九〇年に、緩和ケアの定義がWHOで審議されたと聞いています。その後二〇〇二年に改訂されて、今の定義に至っています。緩和ケアは何をするのか。終末期の患者さんに何をさせてあげられるのか。

○緩和ケアの定義（WHO） 二〇〇二年

緩和ケアとは、生を脅かす疾病に関わる諸問題に直面している患者や家族のQOLを改善するために、痛みやその他の肉体的、心理的、精神的な問題を早期に識別し、誤りなく評価して処置することにより、苦痛を予防し軽減しようとするアプローチである。

予防や識別や軽減に積極的に関わっていかう、というのが緩和ケアの定義であります。あらゆる痛みを緩和していきましょう。それまでの医療というのは、治療すること、元気になるっていただくこと、身体が良くなっていくことを目的としていたのがほとんどであったのですけれども、この頃から少しずつ、痛みを取り除くという分野が出てきたんですね。「トータルペイン（全人的苦痛）」を中心として、身体の痛みであったり、それに伴う精神的な痛みであったり、あるいは社会的な痛み、例えば、入院したらお金がかかりますよね。そのことの心配をされる患者さんもいらっしゃいます。そして、今日お話するところの「スピリチュアルペイン」です。フィジカルペイン、メンタルペイン、ソーシャルペインは訳がそれぞれしっかりできていますけれども、このスピリチュアルペインだけは、ま

だ確定的な日本語訳がないのです。日本に緩和ケアが入ってきた当初は、宗教的ケアという言い方もなされていたようですけれども、現在ではほとんど言われていないみたいです。宗教的なことだけではないだろうということが、スピリチュアルペインの中身になってくるわけです。

存在の問い、死の恐怖。みなさんは、おそらくですけど、こうやって元気に講義を受けられているということは、例えば、ご病気がある方であつたとしても、何とか講義に出られる元気はあるんでしょうね。ひよつとしたら、みなさんのお父さん、お母さんで病気になつていらつしやる方もあるかもしれません。おじいちゃん、おばあちゃんがそうかもしれない。でも、これは何も病気になつた方だけのことではないのです。このスピリチュアルペインは、誰もがどこでも持ちうる痛みだと私は思っております。そうじゃないですか。みなさんが悩まれた時に、「何でこんなに自分だけ悩まにやいけんのだろうか」とか、「何で私だけが」とか、いろんなことを思つたりするじゃないですか。それをスピリチュアルペインと呼んでいるのですね。

それにはどんなものがあるのか。私がたくさんの患者さまにお会いしてお聞きするのは、やっぱり「反省」です。反省と言えば聞こえはいいですけど、ようは今まで過ごして

きたことを振り返っているわけです。みなさまでも二十年ですか、振り返った時にいろいろなことがあるでしょう。五歳の時、十歳の時、十三歳の時…、いろんなことがあったじやないですか。そういったことを振り返る。これが、病気になった時に顕著になることでもあるのですね。そういえば自分の人生どうだっただろうか。そのことを訴えられる方が近くにいればいいんですけども、いない方も多いわけです。あるいは、悔いや後悔、自分や他者を責めることもあります。自分を責める方もいらっしやいます。「ああ、もう私なんて地獄行きですよね」。みなさんがもし、弱っていらっしやる方にそんなことを言われたら何と返しますか。「そんなことないですよ」って言いたくありませんけれども、私は冷たいでしょうかね、「そうですね」って言います。これは、その方の思いを受け止めるという意味で「そうですね。あなたは今までしてきたことを考えると、自分の命が終わったのちは、地獄としか言いようがないですよね」そのように返すと、ちょっと安心されるのですね。でも、時には他の方を責めることもあります。「あの人のせいで私は癌になったの」そういつて言われる方もいます。その時はどう言うか。そうですね、あの人のせいですよね、じゃ、その人に申し訳ないですよね。その時は、「人のせいにするほど、自分の落ち度がないと思つて生きてきたのですよね」って、そんな言葉を返したりすることも

あります。自責の念は、悔いや後悔と重なるところもありますが、「バチが当たった」「私のあれが悪かったからバチが当たったのだ」。もちろん仏教ではそんなことは言いませんけれども、そう考える方がたくさんいらっしゃるということです。そういった問題を一体どうやって解決すればいいか。これは、その方自身が解決していくしか最終的な道はないのです。いくら周りの方がいろんなことを言っても、最後はその方が自分の人生をどう見ていくかということになります。

そして、死後の命の不安と恐怖があります。身体の状況が、どんどん、どんどん、悪くなってきました。今は良いお薬がたくさんありますので、いろんな症状が抑えられるのです。抑えられるというのとはとてもありがたいことでしょう。みなさんも痛いのは嫌じゃありませんか。痛いのは嫌ですよ。私も嫌です。それが全部抑えられる。抑えられるということは、つまり、痛みなく過ごせる時間が多いのです、これは癌の場合ですけれども。そうすると、その間何もなくていいのか。人間はずっと考える生き物ですよ。病院で白い天井を見ながら、いろんなことを考えるわけです。先ほどの、反省、後悔のように、「どうだっただろうか」「どうなるのだろうか」この先のことももちろん心配になります。そして死の瞬間、「ああ、死にたくないな」。みなさんも死にたくないですか。どうですか。

でも間違いなく、みんな死んでいかなくはない存在です。「私のような若い者にそんなこと言わないで」って思うかもしれないですけど、若い方でも死ぬことはありますし、時間が経てば、私もそうです。この世から別れていかなければなりません。それは誰にもわかりません。あるいは死後がどうなっているのか、ということも心配になります。天国に行くのか、地獄に行くのか、何もなくなるのではないか、いろんなことを言われます。人によって葬儀はどうしようかと。ご自身の葬儀ですから後の人がするのですよ、後の方がちゃんとしてくれるはずなのですけど、それも心配の一つになる。あるいは「わしの入る墓はちゃんとするだろうか」と心配される方もあるんですね。あるいは残された家族のこと。特に若い患者さんは家族のことが心配で仕方ないです。自分よりも家族のことが心配という患者さんもたくさんいらっしゃいます。ですから、このスピリチュアルペインは、病気になって初めて出てくるものではないと思います。私も含めて、今、こうして元気であらう時に生じるものでもあります。ですから、医学的で言うところの「病氣」ではないわけですが、「何で自分はこんなのだろうか」この疑問を持つことは、人間として大事なところでもあるわけです。それを、静かに、ゆつたりと、しかも確実に導いていくのが仏教の教えであらうかと思えます。

仏教の生命観

今、ある程度お年をとられた方は、終わる活動と書いて「終活」をされる方が多いです。だいたい六十代を過ぎられると何か考えられています。先ほど話したビハーラ活動もそうですけれども、たくさんの人を巻き込んで自分の命のことを考えることが難しくなってきましたので、今、医療の方からこういったことが提案されています。アドバンス・ケア・プランニングというものです。定義は「将来の意思決定能力の低下に備えて、患者さまやそのご家族とケア全体の目標や具体的な治療・療養について話し合う過程（プロセス）」とされています。簡単に言うと「もしものための話し合い」です。ひよっとしたら、みなさん、ご両親とそんな話をしたこと、一度や二度あるのではないですか、どうですか。どんな話をするかというのと、「病気になった時どうするの」とか、「誰が親をみるの」とか、みなさんで言えばということですが。もちろん、それだけ話をしていれば大丈夫ということはありません。その時は突然やってきますし、どんな状況でやってくるかわかりませんからね。普通は医学的なことを話し合ったり、相続のことを話し合ったりします。そ

れにもう一つは、龍谷大学の早島理先生がおっしゃっていたことですけれども、ちゃんと自分の行き先を確認しておくことが大事だと言われているのですね。みなさんはピンとこないかもしれませんが、何も宗教というのは、命が終わって先のことだけではありません。今を生きていることの支えが、絶対的なものがあるということを見出すのが宗教の力でしょね。ですから、みなさん、ここで時折、こういう宗教講座や先生方の講義でしっかりお聞きになったらいいと思います。この学校を離れたら、そういうことを聞く機会はほとんどないかもしれませんからね。

いのちというのは、「ある日生まれて、そして年を取って、老いて、病にあって、そして死んだら終わりよ」というのが一般的な見方です。みなさま自身はどんな感覚ですかね。もちろん、老いや病を経験してなければそんな問いすらないかもしれませんが、それでも、それに対して仏教のいのちの見方は、いわゆる、網の目のような中の一点ですよと言われているのです。あらゆるいのちと繋がっている命です。ここにいるみなさんはもちろんのこと、私も含めて繋がっているいのちです。そんなこと言ったら好き嫌いある人は、どうか、みんなありますけれども、「あの人と繋がりがたくない」あるかもしれません（笑い）。でもこれは感情的な部分ではなくて、いろんなところで繋がりをなくしては、人間

ここまで、どこまでも、受けたいのちであるということです。頂いたいのちということですね。そして、空間においても、今日ここは大学の一つの部屋でございますけれども、これは無限の世界と繋がっているわけです。そんなこと言ったらますます眠たくなりますか？（笑い）でも間違いないことです。私は今日、広島から来ましたけれども、広島とも繋がっている。天地の中でみんな繋がりを持っている。今その一点にいる、ただそれだけです。だから、そういったものを超えた存在が「私」、つまり、みなさんであるわけです。そのことを「縁起思想」と言います。一般的に、縁起は、良いとか、悪いとか、担ぐとか、言いますけれども、本来、仏教で説く縁起というのは、先ほどお話したようなことです。みんなのちは繋がっていますよということ。

—— 仏教生命観は、時間と空間を超えて、あらゆるものが相互に関係し、支えあっていることを知り、感謝して生きることを教える。また、そのとき、相互に傷つけて合っている現実をも知ることとなる。人間はそれらありのままを自覚することによって、自己中心的なあり方を内省し、あらゆるものへの分け隔てない慈愛を育んでいくように願われている。

これが縁起思想に基づく仏教の生命観です。ですから、感謝して生きることも教えてくださいますし、みなさま方が与えているということも教えてくださいますし、当然、その与える中で、知らず知らずに人を傷つけてしまっていることもありますよ、ということも教えてくださいますのですね。でも、じゃあ、やっぱり結局、自分は自分中心で生きるしかないのだなって思ったときに、実は、それは人間にとつて、とつても大事なところに出会っているということを考えていくわけです。その出会いが何かしらの力によって自分というものを見つめる機会をもらえたというのが、この「分け隔てない慈愛を育んでいくように願われている」ということであります。みなさまは誰一人漏らさず、願われている命であるということですよ。

私は週に一度、病院に伺っていますけれども、それ以外には月に一度ですけれども、女子少年院に行っています。みなさんよりちょっと若い方かな。十四歳から二十歳までの、いわゆる社会的に罪を犯した子が入っている所、女の子ばかりの少年院です。そこでもね、毎回、毎回、くどいように話をします、「みなさまは願われている命ですよ」。子ども

によつては「いや、私はそんなことない。もう、お父さん、お母さんから捨てられている人間ですから」平気で言う子もいます。「それはそれで、辛いでしょ、悲しいでしょ。でも、あなたは今ここに現に生きている。願われていないと生きることは絶対にありませんよ。あなたの目に見えないものかもしれない、感じることもできないかもしれない。でも、必ず、あなたは願われている命ですよ」そんなことを、ずっとその子たちに言い続けています。みなさんも同じことです。そこに出会っていく、気づいていくこと、何か素敵な感じがしませんか。

みんな苦しみの中に

私は、僧侶の衣を着けず、病床に伺うのですね。私は若い方と接することが多いのです。若いといつても、四十代、五十代、六十代……くらいの方です。もちろんみなさん末期の癌の方ですけれどもね。ある時、六十二歳の肺癌の男性でしたけれども、ちょうど春でした。みなさんはお坊さんをどういうふうに見られているかわかりませんが、言ってみれば、亡くなった後に用事のある人間という捉え方が多いわけですね。ある時、お医

者さんが、春だから「今日、花見に行こう」と。「ついでに徳永くん、この患者さんを車いすでお連れしてください」と頼まれたのですね、お医者さんから。「あ、いいですよ。かまいませんよ。ただ、でも、どうでしょうね。患者さんが嫌って言いませんかね、僕の顔を見て」「大丈夫、大丈夫。何とかなるよ」「あ、そうですか。じゃあ行きましょう」って病室に行つて、「はい、〇〇さん、今日はね、お天気もいいから花見に行きましょう」花見といつても病院の中庭にある桜の木ですけどね。「おお、行こうか」「ついでに、この人が同行しますから。車いす押してくれますから」この人とは私のことです。スーツで来るわけです、「こんにちは」ってね。ほら、お医者さんとか看護師さんは白い服を着ているじゃないですか。着てない人間が来るわけですから当然わからない。「おお、こいつは何じゃ」こいつって言われるわけですけど、先生は「うん、まあね…あれですよ」って、お坊さんということをはっきり言わない。そうなたら僕から言うしかないですよね。「あ、すいません。私は実はここにお手伝いに参っている僧侶なのですけれども…」と言つた途端にその方が怒り出して、「はあ？ 僧侶だけはかんべんしてくれ。この世で一番嫌いなんじゃないか」って言われたのです。シヨック…（笑い）。そこまで言われたら引き下がらんのです、本当は。ですけども、これも何かの縁だろうと思つて、「まあ、ご主

人。嫌いなことはわかりましたから、今日ぐらい良いじゃないですか」「嫌じゃ」「ちょっとくらい良いじゃないですか」「嫌じゃ」って言うわけです。私も半分意地になって、「今日だけですから行きましよう！」って車いすを押す。患者さんはその車いすに乗ってるのだけれども「嫌じゃ、嫌じゃ」とだだをこねる、廊下をずつと行く、中庭に出ると、だんだん諦めてくるのですね。「こいつは、しつこいのう」って言われて「すいませんねえ」って言いながら。そして、桜の木の下まで来ました。「おお、桜はよう咲いとるじゃないか」「そうですね、綺麗ですね」「ところであんた。こうやって、わしにしつこく付きまとうぐらいなら、坊さんとして良い話でもしてみろ、わしに」広島弁で自分のこと「わし」って言うのですけどね。「わしに何か良い話をしてみいや」「はい。良い話…?」。今もそうですけど、こうやって全体に向けて話をするのは、こいう状況だからこうしますけれども、もし一対一ならば、「どんな話が聞きたいですか」って聞けば話ができますけれども、いきなり「良い話をしてみいや」って言われても、その方にとって良い話がかはわからないわけです。「そうですか、困りましたね。でも、わかりました」ここで逃げちゃいけませんからね。ちようどその日が四月八日だったのです。みなさん、ご存知ですか、四月八日が何の日か。知っている方、ちよつと…あ、ちらほらいますか。お釈迦様

の誕生日なのですね。クリスマスは有名ですけどね、お釈迦様の誕生日ですよ、四月八日。ちょうどその日だったのです。じゃあ、これはお釈迦様の話をする他はないなと思って、「ご主人、今日はね、お釈迦様の誕生日なのですよ」「ほおん、それで?」「それで、お釈迦様はですね、これは伝説なのですけれども、お生まれになって、七歩歩まれて、天と地を指差して、「天にも地にも我一人尊し」と、この世にあつて、私の命を頂いたことほど尊いことはないとおっしゃったのですよ」って話をしたのです。これは私が良くお説教です話です。そしたら、そのご主人何て言われたか。「それがどしたんじゃ」って。ガクってね(笑い)。「ああ、そうですか。ダメですか」「ダメよ。お前、今わしがどういう状況が知つとるのか」「ええ、一応は:」「ほんまか? 今日四月八日じゃろ。わしは先月三月が誕生日だったんじゃ」と、六十二歳の。「この病院に入院した時、誕生日までは持ちませんよと言われたんじゃ。誕生日もたなかつたのが、何とか今生きとる」四月まで来た。「言ってみれば、もういつ死ぬかわからんちゆうことや」誕生日までと言われたのだから。「そんなわしに、生まれたことが尊いだと? ありがたいだと? 何をぬかすんか」って怒られたわけなのです。せっかくコミュニケーションが取れたかなと思つたら、今度はいきなり怒られたのです。「ああ、ですよね、ですよね:」本当に逃げたかつ

たのですけど、逃げるわけにはいかない。そこからまだ話をしなければいけない。うーん、いろいろ考えたのですね。で、「あ、そうそう。お釈迦様は、ただ単に、生まれてきたことを喜びなさいと言っておられるわけではないのですよ」「おお」「人間の一生は、ずっと苦しみの中でしか生きることができない」これは、一切(いっさい)皆苦(かいく)と言いますけれども、「苦しみの中でしか生きられないということも同時におっしゃっておられます」ということをお話したのですね。「ほお、それはどういうことや」「ですから、ご主人の痛みと苦しみと、私の痛みや苦しみは、確かに中身は違います。だけど、苦しみを抱きながら一日を生きていることには変わらないということですよ。生きるということとは、そのまんま、苦しみを抱えるということです。そのことをお釈迦様は、たんとんと、多くの方に説いておられるのです」。そうしたらご主人の顔がちよっと変わってきたのですね。「ふうん、そうか。わしは何で、この年で癌になつて、もう死にゃならんと思つておつたけど、この苦しみというのは、みんな持つとるんか。わしだけじゃないんか」「そうです。その中身は違いますけれども、苦しみを持つということに関しては同じなのです。みんな苦しみの中で生きるしかないのですよね」「ほうか、ほうじゃのう。この散つていく桜も、皆そうなのかのう。わしもそうなのかのう。あんたもそうなんか」「ええ、

そうです」「ほうか、それでええのう」ご主人が穏やかな笑顔でね、語ってくれました。私たちは、苦しみを自分だけの苦しみだと思ってしまうがちです。確かに内容はそうかもしれませんが、目の前の人も、通りすがりの人も、テレビに映っている人も、みんな、何らかの苦しみを抱えながらでしか生きていくことしかできない、という視点を持つとうでしようか。何か少し見方が変わりませんか。

温かさを求めて

あるいは、これは六十九歳の女性の方ですけれども、卵巣癌の末期で入院して来られました。そして、看護師の言うことを聞かない。あれも嫌、これも嫌、これもしないで、食事はおいしくない、薬？ いらぬそんなもの、点滴？ していらぬ、何もいらぬ……。何もいらぬって言っても病院に入院されているわけですから、周りの方は困るわけです。それで私に相談が来ました「出番ですよ」って（笑い）。「わかりました。行きましょう」女性の所へ伺いました。「こんにちは。私は僧侶ですけど、あなたのお気持ちを聞きに来たのです。良かったらお付き合ってくださいませんか」「嫌よ」って言われて。「そうです

か、この顔が嫌ですか」「そうね、だいたいそんなところね」って言われて凹みまくり（笑）。私も自分の奥さんに言われるのならいいですけど、他人に言われるのはなかなかね、厳しいものがあります。「あなた嫌い。出ていって、何も話することないわ」「そうですね。わかりました。じゃあ、また来週来ますね」「来ないで、もう」って言われて。でも次の週もまた行きました。「ああ、また来たの。だからもういいって言ったでしょ。しつこいわね」「すみませんね。でもどうですか、今日ご気分は」「良いわけじゃないの。良くないから入院してるんですよ」「ですよね。そうですね。それに加えてこの顔が来たらもっと嫌ですよね」「そうよ、良くわかってるじゃないの」それが二週目です。三週目、私もだいぶ疲れてきて、言われるのが辛くなってきたので、今日を最後にしようかなと思っていたのです。そうしたら、その方が、「私ね、もういいの、どうでも。早く死んでしまいたいの。何で生きているかわかりやしない」って話をされたのです。「ああ、そうですね。死にたいくらい辛いのですね」「もう嫌よ。どうでもいいわ。旦那も優しくないし、娘は口を聞いてくれないし、私なんて天涯孤独よ。あなたもどうせ、私を見捨てるんでしょ」そう言われたものですからね、「うん、まあでも、私で良かったら話聞かせてくださいよ」「うん、そうしようかな……」って言いかけた頃、お体が急変したのですね。

身体が震えだしてね。たぶん、お薬の関係でしょうかね、ちょっと意識ももうろうとされだした。どうしようかな…こうなったらお医者さんに任すしかないかな…と思ったのですが、ひとまず、この方との時間を大切にしてみようと。右の手に痙攣が起きたのですけど、その痙攣する手を握って差し上げたわけです。そうしたら、六十九歳と五十歳ですから、そんな、いいと思うのですが、一応、手を急に握られたらね、ビックリするじゃないですか。「何するのよ」って怒っちゃったんですね。「あ、ごめんなさい。あなたがちょっと辛そうだったので、手を握って差し上げたのですよ」「あ、そう。だったらね、もうちょっと優しく握ってちょうだい」って言われて（笑い）、「そうですね、はい」って静かに手を握ってね。そこから、うつら、うつら、とされるようになって、震えていた手も止まったのです。そして、時間にして四十分ぐらいかな、ずっと手を握って一時を過ぎました。そうしたら、とっても穏やかな顔をされていました。それから数日後に亡くなっていきました。

人と人が関わるということは、もちろん限界もありますし、全てが全て上手くいくわけじゃないですけど、時にそうした触れ合いというものは、おそらく誰もが求めているのでしょうかね。

日常という輝き

あるいは、これは五十七歳の男性の方ですけれども、腓尾部癌で、多発転移をされていて、病気がわかった時にはあと三カ月と言われたのですね。この方は、ご自宅で過ごすことにされました。私は直接その患者さんのお宅に伺いました。とにかく、驚きと、怖いのと、寂しいのと、悲しいのと、いろんな感情が一気に押し寄せて来るのですね。まだ仕事もしたい。いろんな思いで、おうちで過ごされていました。奥様と一緒にお話を聞きました。「ああ、もうどうしたらいいかわからない。もう自分の身体に変化が起こるのが嫌じゃ。いつ、どうなるんじゃないか。あんた、教えてくれ」「ごめんなさい。私にはわかりません」「ほんじゃ、何しに来たんじゃ」「その思いをお聞きするだけなのです」「ほうか、やっぱりどうにもならんか」「ごめんなさい」と言いながら何週間もお付き合いしていたのです。そうしたら、ある時、そのご主人がおっしゃいました。やっぱり苦しみを言われる。「わしはどうなるんじゃないか。子どもには迷惑かけたくないし、まだ孫が小さいから、成長する姿も見たいし、どうしたらいいだろうか」「そうですね。どうしたらいいの

ですかね。しんどいですね」ってずっと話を聞いていたら、「それじゃけど……」「はあ、何ですか」「それじゃけど、最近わしは、自分の妻が日常生活をする、台所で料理を作る、朝コーヒーを入れる、洗濯物を干している、その姿や、その動きや、料理の香り……、そんなもの、一つ、一つが輝いて見えるんです。病気になる前は、こんなことは珍しいとも何とも思わなかったけど、今こうして大変な状況になって、それでも、一日、一日、こうして生きていると、何だか全てのものがキラキラしてくるんですよ。これ、何ですかね」とご主人がおっしゃるのですね。「はあ、何でしょうね。ご主人、あなたが今、命を精一杯生きている、一つの証かもしれないですね。ご主人、良かったですね」「ああ、心配はなくならんが、不安はなくならんが、良かったことにしようか……」そしたら、その日に、遠くに勤めていらっしやった息子さんも帰ってこられて、家族、娘さん、お孫さん、みんなと、本当に素晴らしい一時を過ごされたと後で聞きました。そして、亡くなっていかなかった。

この方のように、苦しみ、悲しみを抱えながらも、私たちは、その時、その時、生きるということに懸命ですし、また、その状況だからこそ見える景色があるんですね。みなさまもおそらく、今抱えている問題があるからこそ、見えてくる景色があると思いま

す。そういったことが、静かな、静かな、力になっていくのではないでしょうか。

これは、私の父が残した書物の中の一節です。

悲しみは光

○いのちの妙味

生きる（生死）実態の「かなしみ」を知る人は、倫理の限界を知り矛盾に泣き、そのどん底の中に、光を見いだし、大悲の中に、許されて生かされるいのちを発見するのでしよう。仏智の光りに照らされて知る自己の姿への悲歎こそ、生きる感動と生命の尊さを知るいのちであろう。かかる「悲歎の心」こそ、人類に生きる希望とよろこびを知らされる光であり救いであると思う。

『いのちの妙味』徳永道雄

今日は、『今を生きる（悲しみという光）』というテーマを掲げました。みなさまは、今も、これから、悲しみの中で過ごすことも多いと思います。いや、むしろ、悲しみなく

して私たちは生きていけないと思います。それを退けようとすればするほど、自分にとつて辛いことが多いかもしれません。でも、今お話してきた数人の方々が感じられたように、決してそれは無駄なことではないということです。そして、光になっていくということです。光というのは、つまりは、自分を照らしてくれるものに出会っていくと、静かな、静かな、力を頂けるといふこと。そして、自分や他に慈しみの心を、その光が与えてくださるということであろうかと思ひます。これから、いろいろなきことが、みなさまの身に起こつてくると思ひます。その中で、苦しい時、悲しい時、辛い時に、どうか、自分の命は、一人であるけれども一人ではないのだということ、多くのものに願われている命だということ、静かに感じる時間を持つていただけたらと思ひます。

時間になりました。本日の話はこのようにさせていただきたいと思ひます。ご静聴ありがとうございました。

——二〇一八年一〇月二六日——

